
ice cream

新星爾咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ice cream

【コード】

N8588G

【作者名】

新星爾咲

【あらすじ】

はじめてのデートをお互いの目線から交互に書きました。

暑い、暑い、真夏の太陽が、私の肌にチリチリと照りつける。
ぱつちりおめめを演出するマスカラが落ちてしまわないように注
意しながら、汗ばんだおでこをレースのハンカチでおさえた。
もちろん一番お気に入りのワンピースに、きらきらのミユール。
気合いが入るに決まってる。だって、今日は大好きな彼との初デ
ートなんだから。

「ごめん、待った？」

私が待ち合わせ場所に20分も早く来てしまったにも関わらず、
彼はすぐにやってきた。

彼も緊張してくれてるのかな。そんな淡い期待を胸に私は前を歩
く彼を見つめた。

真夏の太陽に、俺は思わずたじろぐ。でも、決して外に出たくな
いわけじゃない。

なぜなら、今日は俺の大好きな彼女との初デートだから。

眉毛もぱつちり整えたし、可愛くてお洒落な彼女の隣にいても恥
ずかしくない格好をしたつもりだ。

待ち合わせ場所に近づくと彼女はもう来ている。俺だって緊張し
て落ち着かないから早めに来たのに。

申し訳なさとお照れ臭さが半々の気持ちで、俺は彼女に声をかけた。

「ごめん、待った？」

うつん、全然、と言ってほほえむ彼女は、いつもよりさらにかわ
い。

思わずにやけそうになる顔を見られないように、彼女の少し前を

歩こう。

「どこに行くの？」

私が聞くと、彼は笑って、ひみつ、と答えた。駅に向かってるみたい。

ついた場所は、やっぱり駅だった。ここに来るまで私にはひそかな願望があっただけ、かなわなかった。

それは、手をつなぐこと。私と彼はまだ手をつないだことがなかった。デートの時こそは、仲良く手をつなぐのが夢なのに。

でも、まだ15分しか経ってない、気長に待とうと思ったときだった。

やばい、急ごう、と言って彼は急に私の手をつかんでホームに向かって走りだした。

私は、突然の出来事に赤くなったり青くなったりしながら彼に引っ張られるように走った。

「間に合ったあ！」

私たちが目的の電車に乗るとすぐに電車は走りだした。

ふと手元を見ると、やっぱり本当に手をつないでいる。ひんやりした彼の手。真夏なのに。

くすぐりたい気持ちでそのまま見ていると、それに気付いて彼が、ごめん、と手を離れた。

行き場を失った手に寂しさを感じて、私はさっきまで出せなかった勇気を振り絞ってこう言った。

「何で？ずっとつないでいようよ」

さっきよりもかたく手を握って、顔を見合わせて、笑った。

ずっと前から決めていたこの場所。彼女と出会わせてくれたから。あの時の事を思い出して隣を見ると、彼女も、ばつが悪そうな顔でこっちを見ている。

「あれがなかったら、今二人でここにはいなかったんだね」

そういうと彼女はとびきりの笑顔を返してくれた。何でこの笑顔に気付かなかったんだろう。きっと何度もすれ違っていたのに。

あれは去年の夏。この遊園地に友達と来ていた時のこと。

大好きなアイスクリームを持って急いで友達の所に行こうとして立っていた人にぶつかっちゃって。

一目見た瞬間に

「かつこいいなあ」って思ったけど、その時はただ謝るだけで何もなくて。

でも、それからしばらくして、学校で偶然すれ違って。お互い顔を見合わせてたちどまってたっけ。

その人が今この場所で、私の隣で微笑んでくれる。私、シアワセモノだなあ。

「とりあえず、食べる？アイス。」

俺がそう訊くと、彼女は笑顔でうなづいた。

二人でベンチに並んで座って、アイスを食べる。

俺がからかって、ちよっとほっぺたを膨らますのもかわいい。

「彼女はアイスクリームみたいだ。」

彼女を横目で見ながら考えてみる。甘くて、いとおいしい。

「おれはとろけてしまうかも」

なんて本気で思ってみたりして。

きつとこれからも、ずっと。

幸せに浸っていると、彼にアイスを食べようと誘われて、すぐ嬉しかった。

もう誰かにぶつかると、なんてからかわれて膨れてみせるけど、それすらも嬉しい。赤くなった顔、ひんやりとしたアイスでおるかな？

ふと、

「彼はアイスクリームみたい」
と思う。ひんやりとした彼の手。でも私はとろけちゃうかもしれないなあ。

きつとこれからも、ずっと。

(後書き)

やっぱり分かりにくいですね。三年くらい前にほとんど書き上がった
ていたものの蔵出しです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8588g/>

ice cream

2010年12月10日18時47分発行